

# 街を行く

第36回 福島 Fukushima

## 現実、ちょっと違うでしょう

福島市内にやって来ました。東日本大震災の被災地をいろいろと訪ね歩いてきた小生ですが、原発事故による放射能被害を直接的に受けた街へ入るのはこれがはじめて。除染や復興がなかなか進まないとも聞く状況を肌で感じようと散策を開始。まず驚かされたのは、報道で伝わっている情報と自分の目に映る現実とのギャップです。そこではフル装備をした除染作業員が作業するその近くで子供ら無邪気な笑顔で遊んでいる光景がいたる所で見られ、頭をガンと打たれるような衝撃を受けました。この子供たちが呼吸する場所の空気は本当に安全か？ 将来的な健康に支障はきたさないのか？ 問題があるのなら同じ日本人として何をしてあげられるだろう？

景気回復や株価上昇など喜ばしい復興経済に心も浮き立つ昨今。目にした福島の現実を前に、この国の大人として複雑な気分になりました。子供たちはもちろん街に住む人に対しても同じです。タクシーの運転手さんの話によると「今はマスクをする人はほとんどいませんよ。もう（心配が解消されたというより）皆慣れっこなっていますから」。そうなのでしょうね。怖いですが受け入れざるを得ない現実です。ちなみに東京オリンピック招致に向けたブエノスアイレスでの首相スピーチは、ここ地元では非難轟々でした。アピールする先や目的が異なる事情と例えばそりゃそうですよ、国は、その場しのぎ発言ではなく真剣に取り組んで欲しいと改めてお願いしたいところです。開催に向け、明るい未来に思いを馳せるのも



花の写真館と信夫山  
どこにでもある地方都市の風景そのままの状況に戻る日はくるのか。

よいのですが、何より先に手をつけないければならない最優先課題はやはりここです。

『街って、誰のものなの？』という、この連載を通じた大きな命題を改めて考えさせられた訪問でした。街は住む人々のものであり、そこを治める者や利権に群がる者のためではないのです。将来へ繋げて行くという意味では子供たちのものでもあります。子供たちに繋げられない街には全く意味がありません。安全と平和の上に成り立つ文化を子供たちが継承することで歴史が刻まれて行くのです。それが維持されなければ忌まわしい過去しか残りません。いま一度、この問題を考えてみませんか？ 他人事ではなく皆さんの街でいつ起こるかも知れませんよ。

今回の掲載写真の一つは、大正11年に電気試験所として開設された、大正ロマン溢れる石造りの建造物。普段は「花の写真館」として地元の人気スポットですが、震災で内部がダメージを受け現在改

装中です。もう一枚の写真はこの街のシンボルでもある、信仰の山、「信夫山」です。この山も汚染されているそうで、徹底的な除染となれば全部の木を伐採するしかないとのこと。でも現実的には難しいですよ。いま考えなければならぬのはこれまで経験のない街自体の再生です。大きな難しい問題ですが、やるしかありません！

### 南 一弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年株式会社ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。

BLOG「南一弘の負けない不動産投資」  
[http://blog.livedoor.jp/minami\\_kazuhiro](http://blog.livedoor.jp/minami_kazuhiro)